

## ハイデルベルク信仰問答講解説教53「勝利をのぞみ」(2012年10月7日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

主はわたしたちを／どのように造るべきか知っておられた。わたしたちが塵にすぎないことを／御心に留めておられる。人の生涯は草のよう。野の花のように咲く。風がその上に吹けば、消えうせ／生えていた所を知る者もなくなる。(詩編103:14-16)

最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。(エフェソ6:10-13)

## 【説教】

ハイデルベルク信仰問答による説教もいよいよ終わりに近づきまして、今日と来週の日曜日を残すのみとなりました。この講解説教の途中で、先月でしたが牧師である父を送りました。父は遣わされた教会で実に十数年、このハイデルベルク信仰問答の説教を続けておりました。ですからわたくしがハイデルベルク信仰問答の説教を始めたことを父はとでもうれしく思っていたようです。

同労者ですので、父とはよく牧会や神学の話をしました。時々、会話の中でハイデルベルク信仰問答の話題になることがあります。父は「これは奥が深い。どんなに繰り返しても尽きることがない」とよく言っていました。それにしてもよく十数年も繰り返し続けられるものだと思います。良いと思うものはとことんこだわる父の性格が出ています。教会員の若い青年は父のハイデルベルクの説教以外の説教を聞いたことがなく、説教とはこういう信仰問答を用いてなされるものかと思っているようでした。病気のために講壇に立つことができなくなると、わたくしのハイデルベルクの説教を送ってくれと言って礼拝で用いていました。8月の最後の日曜日の説教がキリストの昇天のところだったようで、その礼拝の後、周りの人たちに、「ボクは昇天するのだから安心だ」と言っていたそうです。

自分でも振り返ってみて、このハイデルベルクの説教は極めて教理的な説教だと思います。でもその教理は御言葉で支えられており、結局は御言葉を語ることになるのです。そしてこの御言葉はハイデルベルク信仰問答が最初の問1で語っていること、「ただ一つの慰め」である「わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであること」これに集中していくのだと思います。最後、病床で意識のほとんどない中で、わたくしは父にロマ書の御言葉とこのハイデルベルクの問1を読みました。妻はその時、父が目には涙を浮かべていたと言います。魂の底から慰めを受けていたのです。

日曜日、わたしたちは礼拝で御言葉に与ります。御言葉を受けることは同時に神さまから慰めを受けることです。それは時間が経てば忘れてしまうような陳腐なものではありません。永遠の慰め。この地上と天上を貫いて、わたしたちが死んでも持つて行ける慰めです。毎週そういう慰めを聞いて一週間を歩み始めることができるのは何と幸いなことでしょうか。これは説教者の語りうまさ、テクニクの問題ではありません。あの先生は説教が上手とか下手とかではない。難しいとか分かりやすいとかでもない。語られる御言葉そのものにすでに慰めがあるのです。

先日、ある教会の教会規則を見ておりましたら、「福音の純正を保つ」という言葉がありました。それがその教会の姿勢なのです。それを教会の規則にうたっているのです。「福音の純正」ともよい言葉だと思います。福音が純粹に語られていれば、そこにすでに慰めがある。ハイデルベルク信仰問答には、この福音の純正、福音を混じりけなくわたしたちに伝える言葉が

りばめられています。わたしたちも素直な心でそれを受け取りたい。そこにすでに慰めがあるのです。そこでは聞く会衆も、語る説教者自身も共に慰められるのです。

ここに来てようやく、このハイデルベルク信仰問答の説教が何たるか、その一端が見えてきたような気がいたします。おそらく父もそれを追い求めて毎週の講壇に立っていたのだと思います。来年2013年はハイデルベルク信仰問答が世に出て450年の節目の年となるようです。わたしたちの教会がそのような節目の時を前に、この慰めの言葉に聞き続けていたことは神さまの導きです。またいつか機会があればこの信仰問答をもう一度説教してみたいと思います。

さて、今日の問答は、第52主日、問127のところですが、ここは主の祈りの第六番目の祈り「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」について教えているところです。主の祈りの最後の祈りは、試みからの救いを祈る祈りです。この「試み」とは何でしょう。これは誘惑とも理解されます。誘惑というと、例えば、ダイエットしている人が誘惑に負けて甘いものを食べてしまった。何かをがまんしているのに、それを破ってしまう。そういう時に、悪魔のささやきがあるとか、誘惑に負けると言います。しかしここでの試みはそういうレベルの話ではありません。これは極めて信仰的な試みです。つまりわたしたちが信仰に生きるということは神さまとの関係に生きることで、その関係が壊れてしまうこと。ですからこれはわたしたちを神さまから引き離す試みです。そういう試みが襲ってくるのです。

10月に入りましたが10月は宗教改革記念の月となります。1517年10月31日にマルチン・ルターがその改革の発端となる事件を起こしました。95ヶ条の質問状を彼自身も属していたローマカトリック教会に出したのです。それから戦いの日々でありました。そういうことを始めなければ何事もない。平穏で静かな人生だったでしょう。おそらく大学の神学部の教授として生涯を終えていたかもしれません。でも彼は黙っているよりも闘うことを決意します。黙っていることの方ががまんできない。それはサタンの試みに屈することだったからです。黙って悪魔に屈するよりは、抵抗(プロテスト)することを選んだ。それがわたしたちプロテスタント教会の精神なのです。悪魔に抗する。その試みに抗うのです。こういう戦いは、わたしたちが信仰を持たなければ経験することのないものです。信仰を持つがゆえに悪魔の誘惑は激しさを増していきます。わたしたちが神さまとのつながりを強くすればするほど、そこから引き離そうとする悪魔の誘惑もまた強くなる。わたしたちはそのことを、損をしたと思うのでしょうか。しかし信仰を持たなければ、わたしたちは悪魔の完全な支配の下に置かれるだけのことです。

では悪魔はどのようにわたしたちに迫ってくるのでしょうか。今日の問答に注目しましょう。前半部分を読みます。「恐ろしい

敵である悪魔やこの世、また自分自身の肉」とあります。「悪魔」とあります。カルヴァンは悪魔と言っても、罪と言ってもたいして違いはないと言います。ただマタイでは主の祈りで「悪い者」とはっきり言います。主イエスが荒野で誘惑をお受けになられた時も、「誘惑する者」としてはっきりと描かれています。罪の力というのは、何か抽象的なものではなく、具体的な存在としてわたしたちに迫るのです。罪を精神化して、単に心の中の問題と片付けてしまうことがあります。しかしそういうはっきりした存在がわたしたちを神さまから引き離そうとするのです。これは脅威です。そういう力と力のせめぎ合いの中にわたしたちは常に立たされているということを忘れてはなりません。罪を軽く見てはいけません。エフェソ6：12以下を読みましよう。そういう戦いの中にある。

そしてこの悪魔の策略は巧妙です。信仰問答では悪魔と並べて「この世」「自分自身の肉」と言います。「この世」とは何でしょう。それは悪魔に支配された世と理解してよいでしょう。この根拠となった聖書の御言葉はヨハネによる福音書第15章のところです。「あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから世はあなたがたを憎むのである」(15：19)と主イエスは言われます。またヨハネ福音書の最初のところでも、「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった」(1：10)とあります。それは神の国に敵対する世であり、わたしたちを神の国から罪の世界に連れ戻そうとする力です。

世にはわたしたちを神さまから引き離すものが限りなくあります。時にそれはわたしたちが必要としているものの形をとってわたしたちに迫ります。仕事や家族すら、それらを絶対化する時に、それはわたしたちを神さまから引き離す勢力となります。悪魔はそういうものを利用してわたしたちを誘惑するのです。主イエスは、ある時、母親と兄弟たちが来た時に、「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とは誰か」とおっしゃった。そして弟子たちを指して、「ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である」と言われます(マタイ12：49-50)。少し冷たいように感じるかもしれません。でも主イエスはここで大切なことを示しております。本当の家族とはどういうものか。それはただ血がつながっていけば家族なのではない。そこで家族は成り立つのではない。神さまを中心とした時に、家族は家族になれるのです。家族を結びつける本当の絆とは何か。それが問題なのです。同じ家族でも憎しみあうことがあります。時にそれは深い断絶となります。その時わたしたちは何に支配されているのでしょうか。多いにしてそれはこの世の富であったり、自分のプライドであったり、そういうことで簡単に家族が壊れるのです。それが悪魔の誘惑の仕方なのです。

信仰問答は、この悪魔に並んで「自分自身の肉」と言います。それは何でしょう。この根拠となる御言葉でガラテヤ書のところが挙げられております。(5章17節)これは要するに霊、神さまの霊に反するもの。それがわたしの中にあるということです。ガラテヤ書はこの後に続けてこう記しています。19節以下を読みましよう。パウロはそういう自分を「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」(ローマ7：24)と言います。これには異論はないでしょう。わたしたちは絶えずそういう誘惑に外からも内側からもさらされているということです。

しかもそういう誘惑に対して、信仰問答は「わたしたちは自分自身あまりに弱く、ほんの一時立っていることさえできません」と告白します。そういう誘惑に対してわたしたちはあまりにも無防備で弱いということです。ですから自分で解決できるとか、立ち向かえると安易に考えて、自分を過信してはいけません。自分は大丈夫という過信が一番怖いのです。ペテロは「わたしは決してつまずきません」と言い張った。でもそのペテロと一緒に目を覚ましていることができず、眠ってしまう。そして三度、主イエスを知らないと言ってしまうのです。だから気をつけなくてはなりません。「立っていると思う者は、倒れない

ように気をつけるがよい」と言われているとおりで。

しかし、ここで思い起こしていただきたい。先ほどのヨハネ福音書の御言葉、「わたしがあなたがたを世から選び出した」わたしたちはこの世に属しているのではない。神の国に属する者とされた。イエス・キリストによって、キリストのからだに結ばれて、罪の子ではなく、神の子とされたのであります。だからこそ信仰問答は確信をもって言います。後半部分を読みまよう。

あの荒野で悪魔の誘惑を退けられた主イエスが共におられるのです。十字架と復活により、罪と死を完全に滅ぼしてくださったその主が共にいてくださる時に、わたしたちは勝利をもうその手中に収めているのです。負け戦ではない。完全なる勝利をのぞみ見ながら、なおこの世にあって罪に抗して前進するのです。

信仰問答は「恐ろしい敵」とします。これは「絶対の敵」「戦いの決着まで和解しない敵」という意味があるそうです。この戦いの決着はわたしがつけるものではありません。キリストが最後の時にその決着をつけてくださる。その勝利は約束されています。その勝利のキリストに結ばれているならば、これ以上のものはありません。完全な防備をもってこの悪魔に立ち向かえるのです。誘惑の日々でも、勝利を確信して歩んでまいりましよう。祈りをささげます。